

大谷探検隊の一側面

——南洋諸島を調査した龍江義信の事績を中心として——

和田 秀 寿

はじめに

浄土真宗本願寺派本願寺（西本願寺、以下本願寺）第二十二世宗主、鏡如上人（大谷光瑞師、以下光瑞師）は、第二十一世宗主明如上人（大谷光尊師）の長男として、明治九年（一八七六）誕生した。識見高邁にして氣宇壮大、二十八歳で本願寺第二十二世の法燈を継ぎ、本願寺教団内における組織的強化、国内外の開教・伝道展開をめざし、近代本願寺教団の発展に大きな影響を与えてきた。そして、光瑞師は、考古学・地理学・地質学・民俗学・気象学・建築学・博物学等を援用し、諸外国の仏蹟調査等を主導し現地に隊員を派遣させ多くの成果をあげてきた。その報告書として、インド地域の調査記録を写真図版で構成した『印度撮影帖』（一九〇四年）や中央アジア地域に限り三次にわたって調査した内容が、光瑞師の序文と共に記された『西域考古図譜』（一九一五年）が刊行されている。

これらインド・中央アジア地域を調査した光瑞師及びその隊員の組織を総称して、現在「大谷探検隊」と呼称されている。そして、この大谷探検隊について、その時間軸・空間軸から細別し広義・狭義の意味で捉える考え方が、三谷真澄氏・市川良文氏から提示されている^①。また、「大谷探検隊」の名称の語源についての問題に触れ



第1図 龍江義信の家族写真（明治45年1月30日）
（左から龍江清子夫人・義知・義明・龍江義信、京城にて）

た白須淨眞氏・片山章雄氏の論考もみられる。^②

さて、平成二十六年（二〇一四）は、中央アジア地域を中心に調査した吉川小一郎が調査を終え、その足で光瑞師のいる神戸二楽荘に調査終結の復命を行った大正三年（一九一四）から一〇〇年目にあたる。この節目において、光瑞師や隊員がこの仏蹟調査を何と呼称していたのか、時系列的にいつ頃から「大谷探検隊」と呼ばれたのか、そして、空間的に「大谷探検隊」の調査地域を再認識すべき時期ではないかと

考える。それには、隊員等の調査地域を明確にする必要がある。

そこで、明治二十九年から光瑞師の側近として本願寺に奉職し、光瑞師の命で南洋を調査した龍江義信についての事績をみながら、「大谷探検隊」の呼称とその定義について論じていきたいと思っている。なお、文中の敬称は省略させていただいた。ご寛恕願いたい。そして、今回の拙稿の基本資料となった龍江義信師の資料について提供頂いた、福井県勝山市慶恵寺住職の龍江義正氏、また、龍江義信師の孫にあたる香山玲子氏、新谷晶子氏には心よりお礼申し上げます。

一 龍江義信の事績

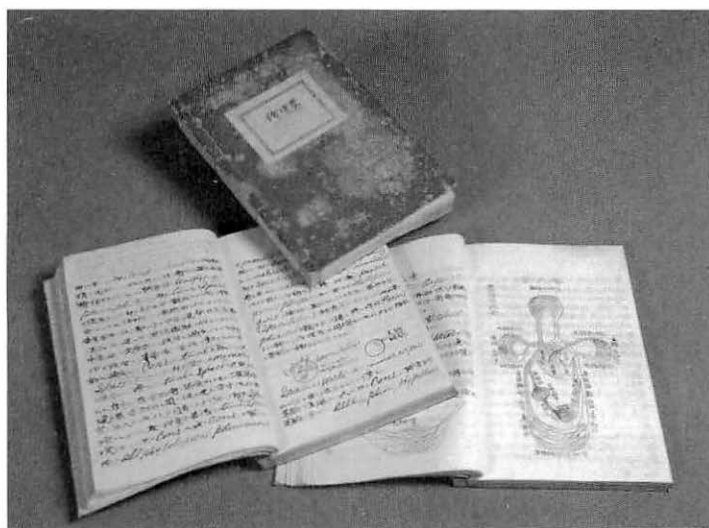
龍江義信は、明治七年（一八七四）三月十五日、福井県大野郡勝山町中後（現勝山市）において慶恵寺第十七世龍江性信と妻増恵の長男として誕生する。明治二十二年（一八八九）四月同町成器小学校高等科を卒業し、九月に本願寺大学林の文学寮に入学する。そして、龍江は、名を義丸から義信に改名（明治三十年十一月十二日）した。^③（第一図）

本願寺文学寮時代

本願寺の教育体制は、伝統の宗学と一般普通学との関係を、宗門の教育制度中に、どのように編制するかの点で、明治時代以降たびたび改革されてきた。龍江が本願寺文学寮に入学した時もその体制は流動的であった。

本願寺には二三〇余年の長い伝統を持つ教義習得の学校である学林があった。しかし、明治政府の発布した学制による一般学校の制度に準じ、本願寺は明治八年に学林の学制改革が行われた。そして、翌年には宗門の教学体制が確立し、大学にあたる最高学府を大教校と定めた。そして、明治十七年大教校から普通学を分離し、新たに普通教校が新設された。明治二十一年大教校から大学林に改名され、普通教校は文学寮と改称された。さらに明治二十四年、本願寺は寺法細則の更新にあたり、文学寮を大学林と分離・独立することになり、翌年には松原通大宮西入の新天地に新校舎が落成、文学寮長に武田篤初が任命された。

このような、本願寺の近代化に向け動き出した教育制度改革の渦中に、龍江は文学寮（当時大学林）子科から文学寮に入学し、文学寮本科（三年）・高等科（二年）へと進学、全科すべて首席で卒業した。^④



第2図 龍江義丸の本願寺文学寮時代の講義ノート



第3図 本願寺文学寮時代の親友
(左より龍江義丸・津野田地五郎・阿部一毛・恵美慶圓)

龍江二十一歳の文学寮本科三年次（明治二十七年）の『生理学』（内田雄太郎口授）・『心理学』（藤井宣正口授）・『論理学』（蘭田宗恵口授）の講義ノートがある。墨書によって丁寧な筆記された講義ノートには、随所に朱書きで下線や囲点・英数文字・註が付記され、特に驚くのは『生理学』のノートである（第2図）。繊細な線

画で人体図が描写され、技量と共に授業に対する姿勢が読み取れる。『心理学』のノートの末頁には「第一学期答案 意識論」、「心理学答案」、「因果論」が数頁にわたって記述されている。ノートには龍江義丸の雅号である「龍吟窟」が記さ

れている。首席で卒業したが、うなずける講義ノートの内容である。

しかし、決して勉学のみ勵んでいたわけではなかった。文学寮本科在籍中の明治二十五年十二月冬期休暇を利用して、親友四名（龍江義丸・津野田地五郎・阿部一毛・惠美慶圓）は、雪の大江山連峰に登頂した（第3図）。また、龍江は体育会系の端艇部に所属していた。部内には本多惠隆（一八九六年高等科卒）・朝倉明宣（一八九七年高等科卒）・野村礼讓（一八九七年本科卒）も在籍していた。文学寮卒業直前の明治二十九年七月二十一日、第二回琵琶湖聯合競漕会の時、艇に龍江も含み七人乗り込み、華々しく優勝を飾った。前年の惨敗もあり、一ヶ月前より琵琶湖辺に下宿し猛練習したという^④。また、毎日の自己体重の検査、対戦相手の偵察まで行った^⑤。当日の競技状況は「第二回琵琶湖聯合競漕会」〔反省雜誌〕第十一年七号に記されている。阿部一毛・佐々木芳照をマナージャー格にあて、舵手原田篤永（了哲）・整調本多惠隆・津野田地五郎（俊讓）・大菅止・井上秀範・和歌月興仁（弘誓）、舳手龍江義丸がメンバーに選出され、見事優勝を果たした。この時、光瑞師が蒸気船を借り受け応援にあたったという。なお、本多惠隆の自坊である徳正寺（長野県）には、端艇部七人の集合写真（龍江義丸・本多惠隆他五名）が保管されている（第4図）。撮影年記は不明であるが写込の人物から想定して、明治二十九年に優勝した時の記念写真の可能性がある。なお、見事優勝を果たした恩賞として光瑞師よりホート二隻の寄贈があったという^⑥。さらに優勝したメンバーの胴上げが行われた折、胴上げされた龍江は、勢い余って、部屋の上を突き破ったという珍事があった^⑦。

明治二十九年八月二十三日、光瑞師が六・七噸のヨットを注文し、東京石川島造船所で進水式が挙行された。東京には湯川良之助・園香雲らが派遣され神戸まで海路回送することとなった。さらに、その先導役として龍江一行（龍江義丸・池田大恵・本多惠隆・廣瀬清徹・池田恵久・阿部一毛・朝倉明宣）七名は洋艇「揚風」第二号にて、明治二十九年八月二十九日午前七時二十分須磨の浦を発し、和歌山沖にて合流する予定であった。しかし、

八月三十日午前七時半頃淡路島塩田付近で天候が一転し、暴風雨となり洲本に着いたの午後二時頃であった。池田舵長は須磨に「タイマツイタ」と発電し午後六時須磨より「アンチャクヲシユクス」と返電があった。そして、和歌浦に無事着きヨットを迎えたのは九月上旬であった。^⑤

ところで、明治二十九年七月十日、文学寮卒業式後、侍僧若宮正隆が龍江義丸の下宿先（田川旅館）に召し使わされ、「猊下の御側に仕へ、後日外国へ出掛ける考へ無き也」と言われ、龍江は「勉強を累ね度希望すれば其れかなふ様ならば御奉公致すべし」と答えたと言う。さらに、第二回琵琶湖聯合競漕会に向けての猛練習中に、大谷光瑞師から龍江に「もう一名文学寮から求めていることが告げられ、龍江は本多惠隆を推薦し、さらに本多惠隆は阿部一毛を推薦したという。」^⑤

その後、龍江・本多・阿部の三名が、初めて本願寺の百華園に入った時、百華園では、明治三十年一月五日の新年会が行われていた。龍江は戸惑いを隠



第4図 第二回琵琶湖聯合競漕会の時の端艇部優勝メンバー（推定）

（前列左から二番日本多惠隆、後列中央龍江義丸）



第5図 東京での集合写真（明治29年）
（左より龍江義丸・本多惠隆・阿部一毛）

しきれず、その時の印象を「一面に粗放の空氣漂う」と記されている。会場で光瑞師より賜った雑煮餅を五十個平らげ、出席した者の中で一番となった。さらに食後六貫目の鉄棒を二本両手に持ち園内を逍遥したという^④。龍江の人柄を窺わせる内容である。龍江は文武両道に優れた青年であった。そして、明治二十九年七月十日文学寮高等科（第十二学年・十名）を無事卒業した。同卒業生として本多惠隆もいた。その時、高等科一年進級生として、後に大谷探検隊に関わる朝倉明宣・市川達讓、本科三年進級生秋山穎人（祐穎）の名も連ねていた。

龍江が百華園に入り本願寺に奉職していた時（明治二十九年八月～明治三十年十一月）、本願寺境内の奥向（御影堂・阿弥陀堂の西側一帯）は関雉殿・南御殿・大仲居・小仲居など多くの建物群が建ち並び、その境界を筋堀等で仕切られていた。そのため、各建物間を隔離し、精神的にも疎開感を与えるため、光瑞師と龍江は夜間人目を忍び幾日も費やし撤廃したそうである。後日、本願寺内でその出来事が問題となったが、本願寺を渾然融和するという光瑞師の姿勢と共に、それに従った龍江の驚嘆する姿が目目に浮かぶ出来事であった^⑤。明治二十九年高等科を卒業してから、東京で撮影された同窓生阿部一毛・本多惠隆・龍江義丸の写真（第5図）がある。おそらく本山に奉職する直前に撮影された写真と考えられるが、端艇部を中心とした知友のつながりを示す資料である。

初期本願寺時代

龍江義丸（義信）は二十三歳の時、明治二十九年（一八九六）八月、本願寺奉任局（内事）に勤務する。そして、九月には東京在駐を本願寺より命ぜられ、月俸三十円、家賃・諸費実費精算の中で、国内留学として東京帝國大学理科大学（現東京大学理学部）人類学室聴講生となり、坪井正五郎につき人類学を学ぶ^③。この状況について、既に一年後に海外調査（オーストラリア）する準備として、龍江に人類学などの知識を吸収させるため、大学に派遣させたことは、昭和六年七月一日付の龍江義信発信上原芳太郎宛書簡に記されている^④。さらに同書簡には、光瑞師の指示で人類学の勉強の傍ら和蘭語の研究を進めるべく和蘭公使テスタ氏を訪ね榎本武陽と坪井信甫の名を聞くが共に高齢のため願ひ叶わず、蘭語を諦め英語のみ極めた。また帆船航海術を取得しようとしたが現地の環境や費用面でうまくいかず、以前にオーストラリアに行っていた小嶺磯吉を指揮下に行くことになったという。また、聴講生の傍ら「反省雑誌」（前継「反省会雑誌」、後継「中央公論」）や英文雑誌「オリエント」刊行の事務も担当していた。さらに、海外調査（オーストラリア）出発の明治三十年の夏、東京では阿部一毛・上原芳太郎の滞在も確認できる^⑤。上原芳太郎は海外調査（オーストラリア）に伴う、事前調査として外遊経験のある陸軍大佐福島安正に、同僚知友の伊藤洞月を訪問し、熱帯地方旅行の心得を聴取した。また流行した麻疹に上原がかかり、その看病にと龍江・阿部は病院に寝泊まりし、運悪く阿部も感染したという記載も見られる。

本願寺は日清戦後の教線拡張計画の必要から、明治三十年、アメリカへ宮本恵順・本多恵隆、明治三十一年インド及びシンガポールへ土岐寂静・朝倉明宣の諸氏を視察のため派遣した。そして、朝倉はシンガポールで和蘭郵船の蘭領印度巡航の案内書を持って帰った。この案内書には蘭領ニューギニア北海岸へは十二週、南海岸へは八週ごとに定期船が巡航していることが記載されており、このことが拡張を蘭領とするのか、英領を予備調査し開拓するのかを決める大きな要点となった。また、明治三十年度の本願寺定期集会（明治三十年十月三十日）

において、第五号第二案「海外開教視察建議」が同年九月三日にハワイ視察から帰国した宮本恵順より提案された。その建議案には、「夫れ彼れ外教徒が其所謂伝道宣教に於ける事業の施設を見るに亦たその順序に外ならず苟も移民の行く所、伝道師必ず之に随ひ一方にはその国家に対し教法伝播の職責を盡し、精神一たび到て其功を奏せざるはなし」と陳弁され、日本人移民の保護のもと開教する重要性を強調した。そして、次年度の予算として南洋視察に約三千円、米国視察に二千元を提案、大多数で可決された。

このような本願寺の動向の中で、現地の地勢・民俗などを詳細に調査し、その伝道開拓の方向性を決める目的で光瑞師の命により、本願寺関係者として龍江・上原芳太郎・阿部一毛、その他小嶺磯吉（長崎）・蝶子夫人・井上清秀（出版社「晚翠軒」）・阪本是儀（牧朴真農商務省水産局長の親族）ら調査班計八名は、明治三十年十一月オーストラリア北域を日指す^⑧。上原は渡航する年の夏に東京で小嶺に会い、志を語り合った。「行雲流水」には上原と小嶺があった時、「私はクリスチャン、酒も煙草も用いませぬ」と小嶺が言ったことに対して、上原は「門徒物知らず、煙草も酒も大好物」と言い、互いに大笑いしたという。そして、この年上原は小嶺夫妻と共に長野県普光寺にも訪れている。

第一回南洋調査 明治三十年十一月～明治三十二年二月

明治三十年（一八九七）十一月二十九日京都を出発し、出港の遅れもあり神戸を出港したのが十二月九日午後〇時三十分であった。門司を経由し香港に寄港したのは十二月十五日で、香港では領事館を訪問し、十八日出港しルソン沖を過ぎ、十二月二十七日ポートタウウィンに到着、木曜島には十二月三十一日に上陸した。ポートタウウィンでは、日本人一〇三名が在住し内七十名が採貝業者であり、当地では採貝業の嚆矢で「チャーリー」と呼ばれ、上原も面識のあった浜村伊助と調査班は会談した。木曜島では、電報の確認と調査の拠点となる借家を探

すべく日本人倶楽部を訪ねた。^⑧『南球之新殖民』（服部徹 明治二十七年）によると、日本人倶楽部（Japanese Club）は明治二十六年一月に在留日本人によって設立され、その委員には石原鋼蔵（和歌山県）・田口亀太郎（長崎県）・小嶺磯吉（長崎県）・中川六三郎（兵庫県）・野波小次郎（島根県）・渡邊俊之介（広島県）・岡本興之助（三重県）・長濱常治（長崎県）・尾崎喜平・前地仁蔵・保科幸三郎・岡村音松・藤井亀次郎・山中亀吉・天南生の十五名が選出された。木曜島では日本人倶楽部の委員である中川・田口そして、松岡好一（長野県）とも会談し情報収集しながら、地元の宣教師からの紹介状を携え島守とも面会した。木曜島の港で撮影された写真には意気揚々の龍江の姿が窺える（第6図）。そして、木曜島から約三二〇km離れたヤマ島の調査準備を進めた。

明治時代、オーストラリアには多くの日本人が移民していた。龍江らが渡濤した時期、木曜島でも一〇〇〇人以上の日本人が在留し、その多くは真珠貝採取業に従事していた。^⑨そして、陸奥宗光外務大臣より、日本貿易の発展の可能性を管理査定する目的で委託され渡航した佐藤寅次郎の報告によると、日本人が単独で採貝する船が四十隻、個人が船を持たず年契約によって借船する船が一三〇隻あった。借船の場合、船の貨貨のみ払い外は採貝に従事した者の収入となった。^⑩当時、木曜島では、キリスト教が中心で、在留の柏木坦のようにトレス海峡諸島で布教活動に従事していた英国国教会所属の Florence Griffiths Buchanan との出会いによって宣教師になった人物もいる。そして柏木は Buchanan とともに、在留日本人向けのバイブルクラスを設けキリスト教の教えを説くようになった。^⑪さらに『南球之新殖民』には、『宗教は英領地なるを以て重に新教を貫び、白人、日本人、南洋諸島人の如きは、之れに信仰を凝らすもの多く』と記され、キリスト教徒優勢の感がある。その中で、龍江以前に、明治三十年二月に本願寺から派遣された佐々木千重が木曜島で伝道活動を行っていた（後述）。

龍江らは、十四・五トンの老採貝船を借り受けヤマ島に向け明治三十一年一月十日木曜島を出港した。途中小島を経由しながら一月十三日ヤマ島に上陸した。島守や税関を訪ね十四日木曜島に帰航した。ヤマ島にはイギリ



第6図 木曜島での龍江義信（中央）

ス人が政庁と税関を設け、島には日本人の青木・井戸川が在留し、採貝船の建造修理業を営んでいた。¹² 龍江他調査班はその青木の家に寄宿し、知事と用談したという。ヤマ島からの帰航の途中、船上で亀の鳴き声を聞いたというエピソードもある。¹³

ヤマ島から木曜島に帰航したのが一月十七日であった。二十一日には島守「ジョン・ダグラス」と会談した。その後、裁判所での審議風景を傍聴したり島内を散策したり、文化習慣・経済状況などを調査した。その間、阿部が熱病に冒されたことや現像したガラス乾板に蚊が無数に付着したこと、そして、フィルムや衣類が蟻によって咬みちぎられる出来事もあった。

三月七日には松岡好一（長野県）と会談し、在留日本人の中でも紀州出身と他国出身との軋轢があり、日本人倶楽部の機能が低下している状況やダイバーの事故の様子などを聴取した。そして、三月九日、官船メリー・イングランド号に便乗を願い、龍江と上原は再びヤマ島に行った。乗船していたニューギニア総監サー・ウイリヤム・マクレグルと島内で、日本から携えた書面を付しニューギニア開拓における土地所有権等について会談した。小嶺磯吉の採貝艇で木曜島に三月十八日帰航した。その後、上原は帰朝の途に就き、龍江・阿部等は残留し調査を続行した。その後、阿部はプリズベン・

ロックハンブトン・タウンズビルを巡回し、龍江は小嶺と農場材木の相場ケアンズを視察し、サトウキビ業など農園業・移民の現状そして将来の開拓準備を担った^④。そして、明治三十二年（一八九九）二月に龍江は帰朝し、直ちに東京帝国大学理科大学に視察の報告を行い、その成果を評価され同大学より賞状を授与された^⑤。この頃の東京帝国大学理学部人類学教室は、イギリス留学から帰国（明治二十五年）した坪井正五郎が教授となり、「土俗」「風俗」などの生活習慣の研究に積極的意義を見出し、日本以外の地域における人類文化全体を視野に入れた研究を実践しようとしていた^⑥。

佐々木千重の事績と南洋調査

佐々木千重（明治四年十月二十六日生、福井県今立郡北坂下村高善寺、現越前市）は、本願寺大学林時代、基球部（野球部）に属し海野善堯・花田凌雲・後藤環爾等と共に白球を追っていた。そこには、スポーツマンの側面と学間に打ち込む佐々木の姿があった（第7図）。明治二十六年には文学寮本科と文学寮予科を志す志願者に対して反省会教育部が実施する授業の受持教員になり、学生を指導した。明治二十九年七月、無事大学林本科を卒業する^⑦。そして、二十六歳の佐々木は、光瑞師の命により明治二十九年十二月五日、南洋諸島の地勢・民俗などの詳細を調査し、伝道開拓の方向性を決める目的で、オーストラリア木曜島に向け神戸港を出発した。日本郵船会社の第三定期航海船東京丸にて神戸港を出港し木曜島に到着する十二月二十六日間の様子は、「南遊日録」（『反省雑誌』第十二号第二号）に詳細に記されている。

佐々木は当時の回顧として、「ビンガイ黑人種の野性的生活を視察し、南洋特種の動植物など全然奇異なるもののみを友として深く熱帯地特有の情趣を味わった」と記している^⑧。一年余り木曜島を中心に調査に従事した佐々木は、明治三十一年二月単身英船デュークチアバツキングカム号にてジャワ諸島に寄港しながら、スリランカの



第7図 佐々木千重夫妻

教場を設置（明治三十二年八月）し、馬來語通訳生佐々木芳照と共に運営していく。^⑦

さらに、カナダのバンクーバーでの開教使（明治三十八年八月―大正二年四月）として、布教活動、英語夜学校、武道館の運営、移民の矯正監督、移民保護事務としての英語翻訳、通訳などの社会事業にも携わった。大正七年にはロシア内戦において第三師団司令部の従軍布教使として布教の傍ら翻訳通訳の事務を行い、零下四十八度の寒度を体感して大正八年四月に凱旋した。大正十一年十一月にはアメリカサンフランシスコ開教本部に入り、大正十二年九月―大正十四年六月までアメリカ開教総長に従事した。大正十五年末、事業の一切を後任に引継ぎ、北海道の小樽別院輪番として小樽双葉実科高等女学校校長を兼務する。そして、過去五回、二十三年間の外遊経験を活かして、小樽実科高等女学校から高等女学校へと昇格すべく、文部大臣との連日の交渉の末、校舎二棟増

コロンボでスリランカの仏教の復興と普及に務めた大菩薩会会長ダルマパーラやバーリ語經典の普及に尽力してきた高僧スマンガラ大僧とも会談した。そして、ベンガル湾からインドのカルカッタに着き、前正覚山など釈迦の聖地を巡拝し、明治三十一年六月帰朝した。その後、再び渡航しシンガポールでの開教使（シンガポール布教所駐在 明治三十二年五月―明治三十六年四月）として、仏教・教育に力を注ぎ、教会・学校の基礎を造りあげた。その間、シンガポールのビクトリア街に布

設・教員の改善・設備の充実を基本として昭和二年三月二十八日付けで認可され、小樽双葉高等女学校の設置をみた。認可の条件となった校舎増設にも、まず室内運動場を造ることなど、学生時分の体育会系クラブの思いが伝わってきそうである。そして、過去の経験を十二分に活かし、小樽双葉高等女学校第七代校長として昭和八年まで校務に従事し、学校の発展に多大な貢献をした。

佐々木は、自分の与えられた責務を着実に全うし、次のステップに止むことなく進む姿勢を貫いた人物である。そして、その集大成が教育の場であり、生徒育成の場である小樽双葉高等女学校であった。佐々木が還暦という節目に六十年間を、「私の過去は在外二十三年の遍歴、徒らに地球上の寄生虫、人生の食客となつて、今にいつ落ち着く術もない。流る、まゝに流れ続けて、命長ければ恥多しに終わるのではあるまいか」と回顧している。⑩
後世に恥を残さぬように、できることを精一杯努力するという意気込みが伝わってくるようである。

佐々木千重の木曜島での活動は、以後の南洋開教の基礎をつくりあげ、その成果を後任の龍江義信に託したものと云える。昭和十九年（一九四四）六月二十三日逝去（七十四歳）。

第二回南洋調査 明治三十二年九月～明治三十六年三月

龍江義信は、明治三十二年（一八九九）九月オーストラリアのクイーンズランドに再渡航する。そして、独・英・蘭の諸領ニューギニアとトルレス海峡諸島、フィリピン島の一部を歴視し、農業・漁業及び歴史・民族・宗教等の調査に従事した。龍江は、その拠点を木曜島として商店「龍江商店」を経営し帆船「パプア号」・「ザブラ号」の二隻を所有し、採貝艇十六隻の代理業者となった。さらに、明治三十四年には蘭領ニューギニアを一周し、ビスマルク諸島に行き小嶺と再会し、龍江所有の「ザブラ号」にてニューブリテン島やニューアイルランド島を調査した。現地の様子は、体験談として雑誌「植民」に現地民の生活・風習・習慣等が詳細に綴られている（第



第8図 龍江義信のニューギニア体験談が掲載された雑誌『植民』

8図)。龍江は人類学的な観察にも注視し、二五〇点に及ぶ民族資料を将来した。その学術的な報告は龍江自らが「ニューブリテン及びニューアイルランド土人」として『東京人類学雑誌』（第二〇八号）、に学術報告し、将来品の報告は「ニューアイルランドの貝殻製貨幣」と題して、東京人類学会総務幹事松村瞭によって『東京人類学雑誌』（第二二二号）に論考された。

一方、龍江は木曜島において雑貨商「龍江商店」を経営し、大陸殖民合資会社や和歌山厚生移民株式会社の海外業務代理人として英人船主と邦人漁民間の紛争の調停に従事した。当時、木曜島には四箇所の雑貨商があり、その内「龍江商店」と「柏木商店」が名高い店と紹介されている。^②「龍江商店」には食糧部・雑貨部・呉服部・美術品部等があった。

さらに、『履歴書』（昭和五年記）には公的機関「日本人倶楽部」を創設、建物も新築し部長に推薦され、タウンズビル帝国領事館の事務分掌を委嘱され日本政府との連絡係となつたと記されている。明治二十六年に設立された「日本人倶楽部」と同一の組織かどうかは判然としない。

龍江は三十歳、帰朝を挟み六年間の南洋調査を果たし、明治三十六年（一九〇三）三月、本願寺に示すべく開拓計画案（資金所要額购地費八十万円、開拓費二十二万円）を携えて

帰朝した^⑤。そして、この南洋調査を高く評価した光瑞師は、明治三十六年四月二十五日に、龍江をインド仏蹟調査を行った隊員と共に東京地学協会会員に推薦し、龍江義信・上原芳太郎・桜井義肇・麻田駒之助・堀賢雄・井上弘円・本多惠隆・渡辺哲信・足利義藏（瑞義）が名誉ある会員となった^⑥。

南洋から帰朝後の本願寺在職時代 ― 須磨月見山別邸建築主任と佐渡丸遭難 ―

明治三十六年（一九〇三）五月二十七日付で本願寺奉任局用係を申付られた龍江は、歴史・民俗学の学術的側面や経営的視点を総合的に判断できる洞察力を高く評価されたのであろうか、北海道の拓殖事情の調査のため出張を命ぜられた。この時奉任局室内部長となった上原芳太郎と共に明治三十六年五月二十八日から六月二十四日までの出張となった。さらに帰山後、インド仏蹟調査班の収集資料の整理研究の拠点となる、大谷家須磨月見山別邸（神戸）の造営の主任を任される。龍江三十歳の時であった。龍江は武庫郡須磨村（現神戸市須磨区）の三万三〇〇〇坪に及ぶ山林の開発、建物・庭園などの施設造営の指揮にあたりながら、自ら洋館まで設計（二十八坪、二階建）し、明治三十七年その竣工に至っている^⑦。また、造営の傍らで、ニュージーニアの開拓及び購地資金（百数円）の醗集運動も行っていたようである^⑧。

一方月見山別邸の建築地では、天幕が張られ、インド仏蹟巡拝の編纂事業も進められていた。足利義藏を主任として日野尊室・上原芳太郎・朝倉明宣・蘭田宗恵・藤井宣正、さらに渡辺哲信・本多惠隆・堀賢雄・井上弘円・升巴陸龍・秋山祐頼・島地大等・渡辺哲乗・前田徳水・野村礼讓・茂野純一・吉見円蔵（以上明治三十六年五月二十日付）、そして、瀧川寛了・朝日保寧（以上同年五月二十一日付）、東京高輪仏教大学を卒業した禿氏祐祥らの総勢二十一名であった。

軌道に乗ったかのようにみえた編纂事業は、明治三十六年九月十日一面の『中外日報』に「テント引払ひ」と

題して、彼岸会後にはテントを引き払い、光瑞師自身本山に常駐する旨が報じられた。その背景には、日露戦争勃発による本願寺の戦時奉公・従軍布教の展開で、研究員もその職務に就くことがあった。そして、明治三十七年一月からは各編纂員は布教使・軍隊布教員として海外に赴いたり、戦時奉公を統轄する臨時事務として設置された本願寺臨時部の部員として本願寺常駐など、同年秋頃には須磨での事業活動はほとんど休止状態であったと言える。龍江もその例外ではなく、本願寺から明治三十七年六月、中国の本願寺遼東半島臨時支部（大連）賛事として従軍布教事務所の監督を担当するように告げられた。そして、遼東半島に向かうため、明治三十七年六月十四日、龍江の乗船した「佐渡丸」は広島宇品港を午後六時に出港し、翌十五日午前六時三十分頃馬関海峡（関門海峡）を通過し、常陸丸と平行して航海していた。

同日午前十時頃、龍江の乗船していた「佐渡丸」は沖ノ島沖を航行中、突如ロシアのウラジオ艦隊に遭遇し攻撃を受けた。その後の船上での避難の様子は壮絶であった。龍江は本船から水船（飲料水運搬用小船）に乗り移り一命を取り留めた。そして二日間の夜の暗闇を堪え漂流三十二時間の末、英国商船ダンバー号に救助され、六月十七日午前七時長崎湾に着き、水路嚮導船豊川丸に移乗、長崎に上陸した。明治三十七年六月十七日午前十時四十四分のことであった。龍江が無事であったことは、即日本願寺臨時部に電報された。そして、龍江は二十一日午後九時三十分七條駅着の汽車で一時帰山する。そこにおいて本願寺記者が龍江自身から聞き取った記事が、避難から救出までの一部始終を詳説に五頁（約五〇〇〇字）にわたって綴られている（第9図）。

また、本船からの避難の様子は、危機一髪水船に飛び移った龍江と同乗者の記録がある。「同船は碇泊部所属の飲料水運搬用満水二十六号といふ小船にて俗に之を団平船といふ長四間半、幅七尺にして同船は本船佐渡丸の右舷に釣卸されロープは其俣本船甲板上の鉄柵に縛り付けられたり。遽て避難者はロープを傳りて乗込む事、頻りなり。瞬間にして船内立錐の餘地なき迄多数の人員に上り尚続々乗込まんとする形勢なれば、斯くては折角の

れなり」と記している。九死に一生を得た龍江は、港より再び大連に向かった。



第9図 龍江義信の遭難が掲載された本願寺の広報誌『海一』

避難者も危険の懼あればとて思慮に富める一員は早くも口ブを切断し本船を遠く離れんとせり。」とある。長さ7m、幅2mほどの小船に救出時七十名の遭難者がひしめき合っていたのである。さらに、本船からの離脱時に小船にかなりの損傷が生じ浸水の恐れがあった。「甲板は一波毎に激水に浸され顛覆の恐れあれば一同は交替して必死となりて之が汲出しに努む。中には疲労せるもの、或は船暈せるものは船底の水槽に下りて休養せるが何れも顔色無かりき。加ふるに艙内狭隘にして互に重り合ふ様なれば空氣の流通悪しく為に嘔吐或は頭痛眩暈するものありて殆ど半死半生の体なりき。」と船内様子が克明に詳説されている。そして、精神的・肉体的にも極限に達し、「遭難者の多くは日中には左程神仏に冥助を祈らざりしが、夜に入り殊に激浪に漂ふては叩頭九拜只管神仏の加護を祈り、其の宗門の異なるに応じ或は念仏或は題目を唱へる等各信仰のあるところに縋りて慰安しつつありしに人生の半面も窺ひ知られて哀

明治三十七年七月五日、従軍慰問活動に従事するため、門司

関東別院輪番時代

日露戦争に際して、本願寺は奉公事業として多くの従軍布教使を中国に派遣した。その布教執務は軍人軍属に對する説教法話、死亡者に對する葬儀及び追悼法要、傷病者の慰撫等であつた。そして、日露戦争後日本は、ロシアから滿州の權益を掌握し、関東總督府や南滿州鐵道株式會社を中心に総合的な滿州經營を展開することになる。そのような動向を見据え、本願寺では、多くの日本人移民者を母胎として積極的に清國の開教を拡大していく。明治三十七年（一九〇四）四月大谷尊由（積徳院）は、日露戦争従軍布教監督として渡清し、明治三十八年（一九〇五）十二月まで大連を中心に従軍布教使を統制した。その間、明治三十七年七月一日付の「教示第十九号寺法細則第一章第二條」により清國青泥窪（大連）に別院を設置し、「関東別院」と称することが発布された。そして、龍江は、明治三十七年七月に本願寺遼東半島臨時部支部（大連本願寺出張所、関東別院）に賛事として赴任し、十月一日に関東別院輪番を申しつけられた。

日露戦争の開戦によつて、本派本願寺派は教團全体を戦時奉公に向かわせる組織として臨時部と出張所を設置し、戦地へ従軍布教使を派遣すると共に戦地に慰問部を設置した。この慰問部は、兵士に對する布教・法要の執行ばかりでなく、「親を捨て妻を捨て子を捨て財産を捨て、国家の為に一身を献げて居る軍人を慰藉する為め眞宗本派本願寺の設置した所」とする兵士慰勞の社会的活動でもあつた。この慰問部は当時大連・遼陽・奉天に設置されていたが、大連では、龍江の発案でこの慰問部の拡張機能施設として大連俱樂部（大連北公園内）が設置された。

大連俱樂部は龍江就任後七ヶ月後の明治三十八年二月二十四日、開場式が挙行された。大連俱樂部の建物は西洋風建物二棟で、その中の一番広い部屋には仏像が安置されていた。室内には音楽室（オルガン・アコーディオン・尺八・少年樂隊の樂器等）・新聞縦覧室・囲碁将棋室・玉突室・喫茶室・活画館（幻灯機）などが完備され、



第10図 東京での集合写真（明治38年3月）

（左より九條恵子・湯川良之助・大谷壽子・龍江義信・大谷武子・老女長尾喜美）

屋外にはテニスコート・擊劍場・角力場が設置されていた。②。そして、その総則によると、大連倶楽部には大弓部・庭球部・音楽部・戯球部・図書部等数部を置き、別に娯楽具を備え時々講話会を開くと記されている。③。

明治三十八年三月には一時帰朝していたように、東京で撮影された集合写真がある（第10図）。それは、東京芝新シ橋の丸木利陽の写真館で撮影され、九條恵子・湯川良之助・大谷壽子・龍江義信・大谷武子・老女長尾喜美が写っている。龍江の自坊である慶恵寺に保管されているこの写真には、表題として「御講義申上ルノ圖」とある。

一年後の明治三十九年（一九〇六）五月二十一日、宗祖大師降誕祝賀会と共に仏堂新築に伴う大連倶楽部上棟式が挙行され、その主任として龍江が役割を担った。④。北京に出張中の龍江を待ち、五月十五日に祝賀会・上棟式の役割等が準備された。当日新築された仏堂において龍江の調聲にて法要は挙行された。法要後散餅の振舞い、七十余名の

角力大会・音楽堂では十三台のオルガン・ピアノを据え、慈善券を作り抹茶の接待も行われた。そして、龍江は北米大震災に伴う被災者救恤のため出店したビヤホール・雜貨店・煙草店・うどん屋・おでん屋などで品物を買う場合、事前に慈善券(十銭)を必要として、店の売上利益の全額と共に義捐金に当てることを地元商店と交渉した。このバザーは慈善バザーと称して人気を博し、慈善券の売上げだけでも五〇四〇枚が売れたという^⑧。関東別院職員の八尋慈薫は、その時の盛況ぶりを次のように記し、「戦後の満州、遼東の一角に於いて、盛大に執行され、宗祖大師が「世の中安穩なれがし、仏法弘まれかし」の遺志に想ひ及んで、吾人無量の快感にうたれざるなきを得んや、げに有望なるは満州開教の前途」と締めくくっている。

龍江が関東別院に就任して二年、大連を拠点とした満州開教は飛躍的に発展・拡大した。その間の龍江の熱意は日を見張るものがあつた。満州各地の出張所に大連の状況を説明し、明治三十九年七月七日以降一ヶ月間、鉄嶺・撫順・奉天・遼陽に赴き、八月十三日以降は旅順に、同月二十四日以降は鉄嶺に出張している。また、龍江不在中には日本から来た修学旅行生(姫路中学校、神戸商業学校、三重師範学校、東京師範学校等)の対応に、関東別院宗務員一同が行いその礼状をみるなど、関東別院職員・布教使(龍江義信・阿部珀琳・谷口常之・福田行恩・網代照隆・花田頼成・八尋慈薫、明治三十九年十一月現在)一丸となり種々の開教活動に取り組んでいる様子が窺える。そして、毎週水・土曜日に龍江自ら部員のために音楽教授の任にもあたつた。さらに、龍江の発案によって関東写真研究会を開設した。その総則には「写真術に依り相互に崇高なる品性と快活なる娯樂を得せしむるを以て目的とす」とあり、芸術に宗教を、宗教に芸術的趣味を加え相互歡樂の中で、止惡作善の動機を与える意味があつた^⑨。

その他、陸海軍将校や知名紳士紳商との宗教談話を行い、自らの修養を重ねる目的で道友会が開設(明治三十九年八月)され、満州仏教青年会(明治三十九年十月、会頭龍江義信)、大連仏教婦人会(明治三十九年十月)、

教育事業として大連女子技芸学校（明治三十九年十一月予定、明治四十年六月開園）、外国語研究部（前身外国語研究会、明治三十九年四月、教授龍江義信・花田頼成・谷口常之他）本願寺経営の大連幼稚園（明治四十年四月）なども設置され、それぞれ活動が行われた。そして、関東別院で展開された各種開教活動に伴う事業は、各支部の手本となっていく。その後、龍江は、満州各地を巡遊していた仏教哲学者井上円了と共に、明治三十九年十一月二十四日横浜丸にて一時帰朝の途に就いた。

翌年の明治四十年四月十一日、龍江は、光瑞師の清国巡遊に伴う大連歓迎準備で早々大連に戻った。^⑤四月二十日午後〇時五十分、光瑞師・大谷籌子裏方・大谷尊由をはじめ、随行員本多惠隆・堀賢雄・兼安洵乗・福井瑞華・谷清輝・甲斐和里子・谷政子・野村栄三郎諸等が大連に到着した。同年五月八日には、清国開教総監付賛事兼任韓国開教総監付賛事親授一等・堀賢雄の後任として清国開教総長に就任する。^⑥そして、龍江は、南満州各地及び山海関・天津・北京・上海・香港を巡歴し、韓国龍山・仁川・釜山の各出張所を巡視した。

その後、再帰朝し、明治四十年七月十二日積徳院（大谷尊由）の福井・吉崎・富山・金沢の四別院及び第二仏教中学の巡視に堀賢雄と共に随行する。^⑦明治四十年七月十六日大連消印の絵葉書（水曜会一同発信）には、龍江宛に宛先住所として「須磨月見山大谷家内」と記されていることから察し、龍江は一時期月見山別院にも滞在していることが考えられる。この時期、大谷家の月見山別院の売却の問題が浮上し、宮内省側との折衝の末、武庫離宮の選地と費用が決まった段階であったことから、月見山別院造営に関わった龍江自身、それに関連した事務処理として滞っていたのではないかと推測される。

明治四十一年一月十三日清国開教総監付賛事長心得を命ぜられるが、在任のまま日本勤務となり營繕委員も兼務することとなる。^⑧龍江資料には封筒に「二楽荘」と墨書された大谷家別荘である二楽荘本館の写真十一枚が遺存する。本願寺の營繕にも関わっていることから二楽荘建築にも関与していた可能性もある。なお、明治四十一



第11図 本願寺関東別院の集合写真

(中央は大谷尊山、その左が龍江義信、前列右より網代照隆・阿部珀琳・堀賢雄)

年三月二十八日光瑞師の随行として龍江と橋瑞超は二楽荘に赴いている。この頃、二楽荘では山上に木材が運び込まれ、本館の建築工事が進行中、二楽荘本館竣工の一年前のことであった。

明治四十一年（一九〇八）五月十五日には福井県から無所属として衆議院議員に立候補（第十回）するが百票の差で落選する。そして、龍江は自らの落選を地方新聞に謝罪文として広告掲載したという。同年十月二十三日、宗祖大師六五〇回大遠忌準備事務所委員を命ぜられる。その後、龍江は、明治四十二年、東京府東京市下谷区（台東区）の五十嵐千代松の二女清（明治二十一年生）と婚姻する。

龍江にとって三十五歳となる明治四十一年（一九〇八）は、人生の岐路に立つ時期で、色々な思いを試す時期でもあり、今までの自分を見つめ直す時期でもあったようである。

還俗

龍江義信は明治四十二年一月二十五日（三十六歳）、本願寺を退職し還俗する。龍江の孫にあたる香山玲子・新谷晶子によると、還俗した理由について光瑞師から進言されたという。光瑞師が龍江を抜擢し、本願寺在職時代から龍江の力量・性格を熟知していた光瑞師が進言したことを否定するには消極的にならざるを得ない。龍江は、光瑞師が大正三年（一九一四）五月に本願寺住職並びに浄土真宗本願寺派管長を辞職したことについて「近來世間に光瑞法主の還俗を云為する者あるが、然し「宗祖も門徒は僧に非ず俗に非ず」と言はれて居るのだから、光瑞法主が還俗されたからとて、何も騒ぐ事はあるまいと思ふ。法主本来の理想を現実さるゝには却つて還俗された方が宜しいと思ふ」と語っている。この龍江の語つた光瑞師評が、光瑞師ではなく龍江自身に置き換えられるような気がしてならない。

その後、龍江は明治四十二年（一九〇九）、南満州鉄道株式会社と並ぶ二大國策会社であつた東洋殖産株式会社の植民調査主任として入社し、大正四年（一九一五）同社朝鮮沙里院出張所主任、大正六年同社本店（東京）事業部勤務を経て、同年、日本における唯一の移民会社となる海外興業株式会社の創立に伴い常務監査役に就任し、昭和十一年五月に同社を辞任するまでの十九年間（大正十二年―大正十三年社長）にわたつて事業に専念し、その発展に貢献した。その間、拓殖事情調査のためフィリピン群島（大正七年三月）、製糖事業の調査のためフィリピンネグロス島（大正八年十一月）北米經由南米ペルー・アルゼンチン・ブラジル（大正十年四月）、南米ブラジルの事業地視察調査から北米經由、ヨーロッパ諸国を視察（昭和四年三月）した。特にブラジル移民事業では、大正十年以降内務省より補助金が下附され、移民奨励の印刷物の配布、活動写真班の巡回や農産物の陳列等さまざまな方法で移植民地の事情の宣伝活動を行い、交通費・乗船港滞在費など移植民の負担を可能な限り軽減する方法も取られた。これらの移民政策は龍江の発案、行動に依るところが大きかったと言える。また龍江は

移民取扱事業の他に商事貿易「アルマゼン海興」や銀行業務「海興銀行」を営み、サンパウロ市郊外では土地分譲事業も行った。そして、海外興業株式会社に席を置きながら東印度起業株式会社取締役（大正八年）・東洋協会評議員（大正九年）・同年六月海南産業株式会社創立取締役（大正九年）・日本羅甸亜米利加協合理事（大正十年）・秘露綿花株式會社創立取締役（大正十五年）・南米土地株式會社取締役（昭和二年）・東洋協会評議員（昭和十一年）財団法人あそか會理事長（昭和十二年）・南洋協會評議員（昭和十二年）などを歴任する。^④

還俗後の龍江の諸活動は、本願寺在職時代のスキルと自身が持ち得た技量を最大限に活かしたものであったと言える。特に會社創設に伴う多くの事業や移植民事業は、その好例である。昭和二十八年（一九五三）七月二十九日逝去（八十歳）。

二 「大谷探検隊」の呼称とその定義

所謂大谷探検隊を主導した大谷光瑞師は、この探検のことを自らどのように呼称していたのか。明治三十六年五月二日大谷本廟において行われた傳燈奉告會法要において歴代門主の仏前で光瑞師が朗読した表白文には、「拜靈蹟於驚峰 採遺經于鹿苑」と記し「如此探検」と結んでいる。また、大正四年刊『西域考古図譜』の序文には、中央アジアにおいて仏教東漸の経路を探った行為を「歴訪」・「探究」・「搜索」・「踏査」という語彙で表現している。さらに光瑞師の英文著作 Kosui Otani 「The Japanese Pilgrimage to the Buddhist Holy Land」(『The Century Magazine』 Vol. LXXII 1906) に於て「the Hongwanji Expedition」と記されている。

そして、各隊員の認識はどうであったのか。それは、各隊員の日記や書簡、談話記事、講演会収録書に現れている。渡辺哲信『渡辺哲信日記』・本多惠隆『本多惠隆日記』（共龍谷大学大宮図書館蔵）には「探検」、藤井宣

正『印度靈穴探見日記』（真宗寺藏）には表題他に「探見」、本多惠隆「中亜旅行記」（徳正寺藏）には「中亜旅行」と記されている。さらに明治三十六年四月十五日発行の『教海一瀾』一六五号に掲載された「聖蹟御巡錫記事 中央亜細亜・印度御巡錫隨行員手記」には「巡錫」・「視察探究」・「探險」と記されている。手記本人の氏名は明記されていないが、内容から判断して同年三月十四日本願寺帰着したインド隊の升巴陸龍である可能性が考えられる。なお、この文章は『仏教文芸』第一巻第四号・『史学界』第五巻第五号にも転載されているが、表題には「大谷光瑞師等仏蹟探險記」・「光瑞師仏蹟探險」と変更明記されている。明治三十六年五月五日に神戸に帰着したインド調査班の井上弘円の談話記事が「大谷光瑞師一行支那印度の探險」一―四（『神戸又新日報』明治三十六年五月二十日）にあり、表題他に「探險」として明記されている。また、明治四十五年六月五日に神戸に帰着した橘瑞超は、同月十八日東京神田青年会館で行われた国民新聞主催の講演会の講演録（『新疆探險記』）の中で「旅行」・「探險」という単語を使用している。インド調査班に加わった清水默爾の追悼文集である『紫風全集』（明治四十年）には、各隊員の追悼文がみられ、その中で日野尊室「法主殿の印度探検班」、桜井義肇「大谷光瑞師中央亜細亜大探検」、井上弘円「仏蹟探險」、島地大等「印度聖蹟探險」の語彙がみられる①。

このように「險」と「検」の違いはあるが、学術的調査と言う意味合いで、所謂大谷探検隊を大略「探検」・「探險」と認識していたのではないかと推測される。それは、各隊員帰国後、十数年を経た後の書簡や報告書にもその意識は薄れず「西域探險」・「遺跡探検」・「踏査」・「仏蹟視察」・「遺蹟探査」と記されていることから判断できることである。

さて、主導者や隊員の所謂大谷探検隊の認識のもとで、日本における報道はどのように扱われていたのであろうか。光瑞師がインド・中央アジア等の仏蹟調査にむけて英国を発った明治三十五年八月十六日以降、日本での報道は留学中の光瑞師との打合せを主目的としてロンドンに向かった本願寺執行松原深諦（随行佐々木至剛）の

帰国を待ってから（十月七日横浜着、十二日京都着）散見される。早い報道として松原深諦談を取り付けた京都新聞がみられる。十月二十日の紙面では松原深諦の英着までの旅程とその後の行動が語られ、光瑞師の「大旅行」・「巡拝」についての旅程が述べられている。同月二十三日の国民新聞には表題「大谷光瑞師の中央亜細亜探検」のとおり「探検」と記されている。未見ではあるが同二十三日には京都新聞に「鐵錫餘響（本派本願寺法嗣大谷光瑞師の壯図）松原深諦談」と題して掲載されている。さらにこの表題と同題そして同じ新聞社名が記された文章が「教海一瀾」「聖蹟御巡錫記事（其一）」（第一五四号 明治三十五年十二月二十五日）に掲載されており、同一内容の記事と推測される。そして、十月末になると全国紙・地方紙の各新聞紙面に散見されるようになる。これらの紙面では、ほとんどが「宗教視察」・「靈場巡拝」という語彙を用いており、各報道記者の認識と光瑞師・隊員の「探検」・「探險」という意識とは、多少違っていたのではないかと思われる。このような一般報道の中、本願寺は公式に十一月五日「嗣法親王中央亜細亜、印度、緬甸、支那、御巡錫予定」、十一月十五日「嗣法親王の大陸探險」と題して「教海一瀾」に発表する。その後、各隊員から本願寺に送信される近信を「聖蹟御巡錫記事」として連載され、表題の「巡錫」や「探險」を使っている。

さて、海外報道関係者や日本の研究者は所謂大谷探検隊をどのように捉えていたのだろうか。所謂大谷探検隊がロンドンを出発して約一ヶ月後に報道された「Japanese Exploration in Central Asia」（『The Times』1902. 9. 11）には A Correspondent writes 「Japanese Exploration」と表記されている。その翌日の発行の週刊新聞『The London and China Express』 Vol. XLIV, No. 2040 には「The Times」と同題または同文の記事が扱われている。同年九月十五日発行の月刊誌『The Anglo-Japanese Gazette』には「The Japanese Archaeological Expedition」と日本人の考古学的探検」と訳せる表題が付けられている。そして、イギリス王立地理学会が発行する地理学雑誌『The Geographical Journal』 Vol. XXII, No. 5 (1903. 11) には「Japanese Expedition

to Chinese Turkestan」と記されている。また、アルベルト・フォン・ル・コック (Albert von Le Coq) が Denison Ross にあてた書簡^② (片山章雄 二〇〇一年) に「Otani's 'pilgrimage'」と記され「巡拝」・「巡礼」と和訳できそうである。

これら四記事はイギリスにおける発行であるが、次にアメリカのニューヨークの月刊誌に掲載されたインド調査班を中心に記された「The Century Magazine Vol. LXXII (1906.1) である。これは「BY COUNT KOSUI OTANI」と記され、光瑞師の英文著作「The Japanese Pilgrimage to the Buddhist Holy Land」と題されている^③。そして、その副題に「the Hongwanji Expedition」と記され、本文中には「This party, first exploring the Tarim basin」'taking a route untried by other travelers and explorers」'As Professor Gruwedel had explored the Turfan district, our party, which followed more definitely the route of Hiuen Tsang」'Our explorers made excavations five miles north of Ceutla at the stupas of Hasa-tam」など「explorers」・「exploring」の英文表記がみられる。

このように、光瑞師著作を含めインド・中央アジア等への仏蹟調査を「expedition」・「explorers」そして「pilgrimage」と英訳され、光瑞師・隊員の「探検」・「探險」という認識の表記と大きく違っていないことが分かる。なかには、明治三十七年 (一九〇四) 三月二十四日に大谷光瑞師がスウェン・ヘディンに宛てた英文書簡には「Central Asia and Tibet」のお礼と共に「missionaries」が使われているが、文意から諸国に派遣された開教使という意味合いで理解できよう。ここで重要なのは、光瑞自らは「expedition」や「pilgrimage」と「missionaries」を使い分けていたのではないかということである。

ところで、光瑞師が「西域考古図譜」の序で将来品の学術的調査を委ねた研究者等は、その研究の中で光瑞師のインド・中央アジア等への仏蹟調査をどのように表現していたのか触れてみたい。明治三十九年二月に雑誌

『国華』の英文誌「The Kokka Volume XVI Number 189」に浜田耕作が「Graeco-Indian Influence upon Eastern Arts」を著しているが、その中に「Japanese explorers」という表現で、仏蹟調査を示している。瀧節庵（瀧精一）は、明治四十四年（一九一〇）「新疆の発掘物」（『国華』第二編 第二五七号）で「探検」、大正五年（一九一六）「印度芸術の東亜に及ぼせる影響に就て（上）」（『国華』第二六編第十冊 第三一一号）の図版キャプションにおいて「西本願寺探検隊」を記している。さらに翌大正六年（一九一七）「哈喇和卓発掘の神像図」（『国華』第二八編 第六冊）で「大谷光瑞師派遣の探検隊」、大正七年（一九一八）「大谷師探検隊の将来せる吐魯番壁画の一断片」（『国華』第二八編 第九冊）で表題のとおり「大谷師探検隊」という表現を使っている。清野謙次は大正五年（一九一六）「大谷氏及び橋氏将来の中央亜細亜発掘のミイラに就いて」（関東庁博物館蔵版）で「大谷師等の中央亜細亜探検」と使っている。将来品の研究の中で研究史的に資料紹介する時、誰のどのような行為かを表示するのは当然のことであり、「探検」・「探検隊」の冠として「西本願寺」・「大谷師」が備わった結果、「西本願寺探検隊」・「大谷師探検隊」という語彙が記されたと想像される。そして、管見によると昭和十一年（一九三六）『考古学雑誌』第二六卷第九号の森修「中亜発見の指輪」に「大谷探検隊」が確認できる。その後、昭和十七年、熊谷信夫が「ベゼクリク第19號窟寺将来の壁画」（『美術研究』第一二三號）において「大谷探検隊」を使い、「ベゼクリク第二十號窟寺将来の壁画」（昭和十七年）・「西域彫塑雜記」（昭和十八年）・「ベゼクリク第四號窟寺将来の壁画」（昭和十九年）等でも「大谷探検隊」という語彙が散見される。

以上のように、現在周知された「大谷探検隊」という呼称は、研究者の間で経年的に変容し、最終的に昭和戦前期に使い出された用語であると考えられる。そこには、資料紹介の中で使われた用語であり、大谷探検隊の隊員・範囲・時期と言った用語の意味付けは全くなされていない。現在でもインド・中央アジアを探検調査したのが「大谷探検隊」という狭義の意味で認識されている。しかし、広義の意味で大谷探検隊とは、光瑞師の指示で

諸外国に派遣、または留学先からの合流も含み、現地で探検的活動を行った現地調査班、さらに月見山・二楽荘において将来した資料の整理・研究を行った整理研究班を含めた調査班であると考えられる。これらのことを詳細に調べることが、光瑞師の一事業である大谷探検隊の全貌把握につながると理解している。龍江義信の南洋調査はその意味では、光瑞師の命で現地調査を前提とした国内留学から現地調査といった点では、大谷探検隊の範疇として把握できるものであり、光瑞師の一事業の一端を担う調査と考える。さらに、各調査班が派遣される以前に予備調査として赴いた調査者も含めるべきもので、龍江義信の南洋調査を例に挙げれば事前調査として木曜島に赴いた佐々木千重もその一人であると言える。このことを考えれば、広義の意味で明治三十二年に光瑞師の主導した清国巡遊も当然含まれるべき調査班である。また、片山章雄の指摘する明治四十年からの梅上尊融のインド・南北アメリカ踏査、明治四十年の柱本瑞俊（安満星）のインド・カシュミール調査、大谷尊重・渡辺哲信のアフリカ・インド踏査（明治四十一年）も該当するであろう。

おわりに

平成二十六年（二〇一四）は、大谷探検隊の中央アジア調査班（第三次）吉川小一郎が、神戸港で橋瑞超・柱本瑞俊・中川源三郎を迎える中で帰国し、光瑞師のいる二楽荘において復命した時（大正三年七月十日）から一〇〇年目になる。大谷光瑞師の一事業である大谷探検隊の全貌を把握するには、そこに携わった多くの調査員の事績を明らかにしていくことも、重要であることに気づかされる。

最後になったが、この拙稿を執筆するにあたり、以下の方々に数々のご指導・ご鞭撻・文献の閲覧・複写でお世話になった。末筆ながら記して深甚なる敬意を表したい。

朝倉浄順・大原実代子・片山章雄・木下かな・香山玲子・酒生文彦・佐々木正信・鹿浦正文・新谷品子・龍江義正・禿氏恵俊・本多得爾・三谷真澄・東京大学附属図書館・本願寺史料研究所・龍谷大学大宮図書館

平成十九年（二〇〇七）年十一月二十七日、龍谷大学深草学会で宮治先生とお会いする機会があり、博物館構想（龍谷ミュージアム）についての考えをお聞きすることができた。その時、今までなかった仏教の総合博物館をめざす熱い意気込みを感じたことを覚えている。多くの方に期待されるようなミュージアム事業に未だ十分に報いることができていないが、これからの一層の研鑽を積む事によって、その責を果たしていきたい。現状で整理できた大谷探検隊の認識を述べたことに今は満足し、宮治先生に将来の奨励を鶴首して頂こうと思っている。これからの先生の益々のご活躍とご健勝を心より念じるものである。

（平成二十五年十一月二十九日）

註

① 三谷真澄「大谷探検隊と収集品の現状 第四講」発表資料（「大谷探検隊収集資料の物語仏教文化」龍谷大学REC講座、龍谷大学、二〇〇八年）

市川良文「探検隊員の足跡 二堀賢雄と渡辺哲信 第三回」発表資料（「大谷光瑞師と探検隊員の足跡」、龍谷大学、二〇〇八年）

② 白須浄真「大谷探検隊 その歴史的認識への試み」（「あうろーら」創刊四号、二一世紀の関西を考える会、一九九六年）

片山章雄「二楽荘と大谷探検隊」発表資料（『特別展 モタニズム再考 二楽荘と大谷探検隊』関連講座、芦屋市立美術館博物館、一九九九年）

片山章雄「一九〇二年八月、大谷探検隊のロンドン出発」（『東海大学紀要文学部』第七五輯、東海大学、二〇〇一

年)

片山章雄「大谷探検隊の足跡」(『季刊 文化遺産 シルクロードと大谷探検隊』第一号、島根県並河萬里写真財団、二〇〇一年)

片山章雄「大谷探検隊の活動と大谷尊重(光明)・渡辺哲信」(『東海大学紀要文学部』第七七輯、東海大学、二〇〇二年)

③ 龍江義信『履歷書』明治四十二年二月記、一九〇九年

龍江義信『履歷書』大正一四年一〇月終記、一九二五年

龍江義信『履歷書』昭和五年記(追記註と昭和二年まで記)、一九三〇年

龍江義信『履歷書』昭和二年記、一九四六年

④ 上原芳太郎「芦の屋漫筆一七」(『大乘』第一六卷第八号、大乘社、一九三七年)

⑤ 昭和六年七月一日、龍江義信發信、上原芳太郎宛書簡、本願寺史料研究所保管

⑥ 龍江義信「思想界に生きんとす光瑞法主」(『武俠世界』第七卷第四号、武俠世界社、一九一八年)。なお、龍江義

信の帰俗については、光瑞師の意向であつたことを思わせる龍江自身の思いも記されている。(『後藤環爾君を憶ふ』

『後藤環爾師追想録』後藤環爾師追想録刊行会、一九四〇年)

⑦ 上原芳太郎「芦の屋漫筆一六」(『大乘』第一六卷第七号、大乘社、一九三七年)

⑧ 上原芳太郎「海南飛鴻」(『外遊記稿』、一九〇六年)

⑨ 農商務省水産局編「南洋之水産」、農商務省水産局、一九一四年

⑩ 佐藤寅次郎「木曜島の話」(『地学雑誌』第一三卷第六号、東京地学協会、一九〇一年)

⑪ 鈴木明美「オーストラリアにおける日本人移民史——初期移民柏木坦の事例をもとに——」(『名古屋市立大学大学院

人間文化研究科人間文化研究』第九号、名古屋大学、二〇〇八年)

⑫ 上原芳太郎「南遊の思出(其の一)」(『行雲流水』、有光社、一九四〇年)

⑬ 上原芳太郎「亀の鳴き聲」(『大乘』第一五卷第一〇号、大乘社、一九三六年)

⑭ 伊能嘉矩「南ニユ、ギニ―土人の風俗」(上・下)・『南洋探險談』(『中央公論』第一四年第一〇号・第一一号、

中央公論社、一八九九年)。この論文は、龍江義信が第一回南洋調査から帰朝した折、東京帝国大学人類学教室にお

いて、龍江自身が当地の状況を談話した内容を伊能が記したものである。本誌は、「南ニュー・ギニー土人の土俗」(『東京人類学会雑誌』第一六二号、東京人類学会、一八九九年)として既に公表されていたが、龍江・坪井正五郎の承諾を得て再掲されたものである。

白龍江(龍江義信)「南洋の食人種(其一)」(『中央公論』第一四年第四号、中央公論社、一八九九年)第一回南洋調査から帰朝した時の現状報告。

白龍江(龍江義信)「墳墓(全世界の墳墓誌)」(『中央公論』第一二年第三号・第四号、中央公論社、一八九七年)二回にわたって掲載した論文で、まさに東京帝国大学人類学教室の研究方針に則した研究レポートであった。

⑮ 『本山録事』一八九六年八月一日発行、本願寺、一八九六年

⑯ 佐々木千重「還暦は十年後に」(『小樽双葉高等女学校校友会会報』月刊双葉、第五〇号、小樽双葉高等女学校校友会、一九三一年)

⑰ 佐々木千重「新嘉坡教報」(『教海一瀾』第六四号、教海雜誌社、一九〇〇年)

⑱ 佐々木千重「流転」(『小樽双葉高等女学校校友会会報』月刊双葉、第四九号、小樽双葉高等女学校校友会、一九三一年)

⑲ 龍江義信「喰人種棲息するニューギニア探險談(一)」(『植民』第三卷第一号、日本植民通信社、一九二四年)

龍江義信「世界地図上の暗黒点ニウギニア蠻界探險紀行(二)」(『植民』第三卷第一二号、日本植民通信社、一九二四年)

龍江義信「世界地図上の暗黒点ニウギニア蠻界探險紀行(完)」(『植民』第四卷第一号、日本植民通信社、一九二五年)

⑳ 編者「本曜島の概観」(『国土』第六卷第四九号、造士会、一九〇二年)

㉑ 『東京地学協会記事』(『地学雑誌』第二十五号第一七三卷、東京地学協会、一九〇三年)

㉒ 『本山録事』一九〇三年六月三日発行、本願寺、一九〇三年

㉓ 吉川小一郎「月見山のころ」(『大谷光瑞上人生誕百年記念文集』、瑞門会、一九七八年)

㉔ 無記名「龍江従軍布教使遭難談」(『教海一瀾』第二二三号、教海雜誌社、一九〇四年)

㉕ 龍江義信「長崎上陸之部」(『佐渡丸遭難記』、年代不詳)

- ②6 「関東別院設置の教示發布に就て」(『教海一瀾』第二八七号、教海雜誌社、一九〇五年)
- ②7 「本派本願寺慰問部」(『教海一瀾』第二六五号、教海雜誌社、一九〇五年)
- ②8 無記名「大連俱樂部の近況」(『教海一瀾』第二六四号、教海雜誌社、一九〇五年)
- ②9 八尋慈薫「満州通信(二)」(『教海一瀾』第三二二号、教海雜誌社、一九〇六年)
- ③0 八尋慈薫「満州通信 第三信」(『教海一瀾』第三二三号、教海雜誌社、一九〇六年)
- ③1 八尋慈薫「満州通信 第六信」(『教海一瀾』第三一九号、教海雜誌社、一九〇六年)
- ③2 無記名「龍江義信氏」(『中外日報』一九〇七年四月一三日二面、中外日報社、一九〇七年)
- ③3 「本山録事」明治四〇年五月一八日発行、本願寺、一九〇七年
- ③4 「海外開教要覧」、海外開教要覧刊行委員会、一九七四年
- ③5 「本山録事」明治四〇年七月二二日発行、本願寺、一九〇七年
- ③6 「室内部日記」第一四八号 一九〇八年 本願寺史料研究所保管
- ③7 池内啓「第二節 政党・政派と選挙 衆議院議員選挙一覽」(『福井県史』通史編五、福井県、一九九四年)
- ③8 無記名「龍江氏の落選」(『中外日報』一九〇八年五月十八日二面、中外日報社、一九〇八年)
- ③9 「本山録事」明治四一年一〇月二二日発行、本願寺、一九〇八年
- ④0 龍江家「戸籍」
- ④1 日本移民五〇年祭委員会編 「龍江義信」(『物故先駆者列伝』―日系コロニアの礎石として忘れ得ぬ人びと―、日本移民五〇年祭委員会編 一九五八年)
- ④2 「海外興業株式会社小史」(海外興業株式会社、一九二四年)
- ④3 昭和六・七年、上原芳太郎宛書簡、本願寺史料研究所保管
- ④4 白須淨眞「第一次大谷探検隊に係る佛教寺(安芸高田市)・神根善雄資料について」(『広島県立歴史博物館研究紀要』第一号、広島県立歴史博物館、二〇〇九年)
- ④5 金子民雄「スウェン・ヘディンと二人の日本人 大谷光瑞と河口慧海」(『清泉文苑』第二二号、清泉女子大学人文科学研究所、一九九五年)
- ④6 片山章雄「大谷光瑞の英文著作」(『東海史学』第三六号、東海大学史学会、二〇〇一年)

図版註

- 第1図・第3図・第5図・第6図 個人所蔵
第8図 東京大学附属図書館所蔵
第11図 個人所蔵
第4図 本多徳爾(徳正寺)所蔵
第9図 龍谷大学大宮図書館所蔵
第7図 朝倉浄順(浄覚寺)所蔵
第10図 龍江義正(慶恵寺)所蔵

キーワード 龍江義信・大谷光瑞・大谷探検隊・佐々木千重